アジア・アフリカ地域研究 第22-1号　2022年9月
Asian and African Area Studies, 22 (1), 2022

書　　評

Rie Nakamura. *A Journey of Ethnicity, In Search of the Cham of Vietnam*, first edition. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2020, xiii + 238 p.

伊藤正子 *

本書は，ベトナム・メコンデルタに居住するムスリムのチャムに初めて注目した著作である．多数派民族キンの王朝に滅ぼされたチャンパ王国の故地中南部に住むチャムだけが，末裔として「純粋」で「本物」の文化を受け継いでいるという観点に疑問を呈し，メコンデルタと中南部グループの両者のエスニシティの有り様を対比させ，国家の少数民族政策との相互作用にも触れながら，現代社会におけるかれらの生きざまを描き出した．著者は留学先の米国の大学院で，チャムの難民グループに出会ったが皆ムスリムであった．しかしかれらがフランスから招聘し講演を依頼した高名なチャム研究者は中南部のチャムについて語り，著者は講演内容と友人となったムスリムのチャムが全く異なっていることに気づく．このムスリムのチャムとの出会いが著者にチャムの多様性に気づかせた．評者は，キンの文化人類学者が「メコンデルタのチャムは自分たちの歴史を忘れた人々であり本物ではない」と語るのを聞いたことがあるが，著者はベトナム人研究者の「真正性」言説に抗いつつ，1990年代以来25年以上にわたりチャム研究に従事してきた．本書はその集大成である．

第1章「チャンパ王国」では，チャンパの誕生からの歴史的な経緯が描かれる．ヒンドゥー教と9世紀から始まったイスラム教の伝播，そして海洋交易による繁栄である．交易港を狙ったキン王朝の南進による領土の侵食が11世紀より始まり，19世紀前半に完全に政治的な独立を失った．またベトナムの国史におけるチャンパの位置づけの問題を，王国の崩壊を例に，ベトナム国家の幾つかの語りから論じている．まず崩壊については触れないか，キン王朝によって崩壊したことをぼかす語り方．階級闘争として説明し，封建制と母権制の下にあったチャンパは遅れていたとして，キンによる併合を正当化するもの，また「友好的な文化交換」「二つの文化の結婚」と描写し，キンによる占領をカモフラージュするものなどである．

第2章は，フィールド調査中に遭遇した数々のトラブルを紹介し，その原因がベトナムの歴史と社会構造に深く根差したものであることを指摘する．たとえば，南ベトナム時代に中部高原の少数民族を中心に結成されていた反政府組織FULROに一部のチャムが参加していたため，チャムが現在でも外国組織から援助を得ているのではという不信感が国家側にある．またメコンデルタに比べて中南部のチャム地域では，行政機関の少数民族関係部署がキン幹部で占められている場合が多く，チャムに対する知識と理解が足りない．こうした事情から地元のキン幹部は外国人のチャム研究に非協力的である．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

第 3 ～ 4 章はフィールド調査の成果で，まず第 3 章は中南部沿岸，特にニントゥアン省のチャムについて，エスニックアイデンティティが過去のチャンパ王国とのつながりにあると論じる．儀式，チャム文字の書記体系やチャム語・チャム文化の起源の探求，部外者との結婚を避けることなどを通じて，文化的伝統の尊重と保存によりエスニシティを主張してきたという．一方，チャム内部では，流動的な二元論として，男性と女性の領域である ahier と awal の概念により，エスニシティが示される．2 つの宗教グループ，同じ硬貨の表と裏にもたとえられるバラモンと，土着化したイスラムとされるバニの相互依存性もこの二元論で説明される．第 4 章で扱うメコンデルタのチャムにとって，チャムであることはムスリムであることと同義である．イスラムに改宗すれば，キンでも華人でもその他少数民族でも誰でもチャムになれる．チャムと結婚しなくても，チャム語ができなくても，イスラムの宗教的慣習を熱心に実践するかどうかが，エスニシティを決定し，共同体メンバーとして認められるかどうかのカギとなる．中南部のチャムのエスニシティが家系的に決定され，歴史的なチャンパ王国から継続している感覚をもっているかどうかが大切なのとは対照的である．しかしムスリムとはいうものの，その共同体内部に入ると，魔術や悪魔祓いを実践するなど非イスラム的な要素があるが，かれらは「宗教と文化・伝統は異なるものである」と説明し，自身をインド系など他のムスリムと差別化している．

第 5 章ではチャムとベトナム国家との関わりが，エスニシティに与える影響について「文芸」と呼ばれる創作ダンスを例に論じる．国家はチャムを少数民族のひとつとして認定しており，チャムには「チャム族」の定義に沿ったアイデンティティの構築が要請されている．チャンパ王国はベトナムの国史に組み込まれ，その遺跡は国家によって歴史・文化遺産に指定され，チャムは「往古のチャンパの人々」として描かれる．キンの幻想によって創られたチャムの宮廷舞踊はベトナムの民族文化の一部とされ，中南部のチャム自身も一少数民であることをアピールするため，そのようなエスニックな目印を一部用いている．一方，メコンデルタのチャムは，チャンパの歴史と自分たちを切り離し，イスラム教を軸に自分たちの新しい歴史を構築しているため，ベトナム国家の外側に置かれた存在となった．しかし，チャムとしてのアイデンティティを証明するため，かれらもまた中南部チャムの扇子ダンスの要素を取り入れたりしており，これらは国家が 2 グループをひとつの少数民族として認定した影響といえる．

第 6 章では，ドイモイ後，少数民族の置かれた地位に対し抵抗する空間を，チャムが拡大する可能性について論じる．発展途上で，前近代的で，自然にやさしいという伝統的な少数民族のイメージは，たとえば織物の布を使った小物やカテ祭りなど，外国志向のマーケットや観光産業に支持されている．しかし人気が出れば出るほど少数民族自身はその所有者としての地位を失い周縁化され，ドイモイは市場志向で少数民族文化の国家統合

を促進する．この波にうまく乗った2人の画家（ひとりはチャム，ひとりはキン）が紹介される．かれらは政府が創り出した少数民族のイメージに適応して創作を行なっているが，中南部のチャムの芸術家，ダン・ナン・トの作品は，チャム自身の芸術的語彙を用い，チャンパの歴史やチャムの伝統の知識がある人々だけにわかるメッセージを埋め込んでいる．かれの作品はチャムが自分たちの文化を取り戻す可能性を感じさせるという．

そして結論では，国家が民族分類を行なうとエスニックな意識を次第に形づくることになると指摘，さらにチャムは自身の性質をキンとの対比，つまり少数派対多数派，貧困対富裕，遅れている対発展しているなどと認識し，相互作用的なアイデンティティであるとする．そして福島の原発事故後にニントゥアン省で持ち上がった日本による原発建設計画を挙げ，これは国家のための犠牲のシステムと内なる植民地主義を創り出すと断罪している．

以上のように，チャムとベトナム国家との関係，チャムとキンとの関係，チャム内部の異なるグループ同士の関係，本書評では触れられなかったが正統派ムスリムとメコンデルタのチャム，あるいは正統派ムスリムと中南部のバニとの関係，チャムと中部高原の少数民族との関係，ベトナム内部のチャムとディアスポラ状態にある国外のチャムとの関係など，著者はチャムのエスニックアイデンティティが創造される重層的な場を設定して，歴史的変容とともに分析し，その複雑な諸相を描き切っている．劣った立場，不利な状況に置かれたチャムの人々に寄り添った視点が一貫している点にも共感した．

さらに，国家の少数民族政策の弊害を，チャムに対する文化政策を例に批判している点が興味深い．少数民族政策に携わるキン幹部たちは，チャムの文化や芸術が市場経済の一端を担い世界的にも人気が出るにつれて，著者が指摘するように当事者のチャムの手から離れて行くことに気づかない．国家の目指す少数民族「文明化」政策をキン幹部は「善意」で遂行しており，自分たちが少数派を搾取してしまっていることに極めて鈍感である．

以下，疑問をいくつか．まず，中南部沿岸とメコンデルタの2つのグループが生まれた経緯に触れていないため，なぜかれらのエスニックアイデンティティが異なることになったのかがわからなかった．まだ解明されていない問題なのかもしれないが，何らかの言及が欲しい．2つ目に，海外のチャムはほとんどがムスリムネットワークに含まれるとのことだが，最初に著者が出会ったチャムのグループは，中南部のチャムが出自の有名な学者に講演を依頼している．かれらは国外に出て，ベトナム国家による「ひとつのチャム」が望ましいとする圧力からも自由なはずだが，なぜ関係の薄い中南部のチャムとわざわざ関係をもとうとするのか．ムスリムとしてのアイデンティティは維持しながら，ムスリムのチャムをチャンパの歴史と結びつけようという試みなのか．「ムスリム」という宗教アイデンティティだけでは足りず，「国をもっていた」という歴史的記憶を必要としているのか．

以下は細かい点だが，「Conclusion」とあるが，内容がニントゥアン省に日本が建設を予定していた原発の話などになっている．原発輸出の問題に関わっていた評者は，著者がこの問題を大きく取り上げたことに感謝したいが，コラムのような形で取り上げるのも一案だったのではないか．また，［大川 2017］への言及が無かったが，カンボジアとベトナムの同じメコンデルタのチャムの比較も知りたかったことのひとつである．

以上，メコンデルタのムスリムのチャムを含めて，ベトナム全体のチャムを詳細に分析してそのエスニシティを検討した本書は，ベトナム研究者やチャム研究者だけでなく，エスニシティ研究やムスリムネットワークに関心のある方たちにも広く読まれるべき力作といえよう．

引 用 文 献

大川玲子．2017.『チャンパ王国とイスラーム―カンボジアにおける離散民のアイデンティティ』平凡社.

関根康正編.『ストリート人類学―方法と理論の実践的展開』風響社，2018 年，768 p.

北嶋泰周 *

本書は編者が著書『〈都市的なるもの〉の現在』及び国立民族学博物館の共同研究「ストリートの人類学」で試みてきた議論を，方法と理論の実践的展開として発展させたものである．序章において編者はストリート人類学の目的が現代を生きる人々に必要とされる「自己限界を生き抜くという根源的な生のあり方に届くような深みを持った真の遊動性に触れた実践知の提供」(p. 22) であるとする．その背景には民衆がホーム中心的な発想でやり過ごせていた状況が不安定化し，ストリートを生き抜く知恵が必要になったことがある．そこで編者が注目するのはヴァルター・ベンヤミンの「敷居」概念であり，編者自身が「ストリート・エッジ」と言い換えるこの場所に，時間と空間の交差の中で実践行為としての創発が生まれるとする．その創発は他者を排除する自己中心的な「ネオリベ的ストリート化」での往路の想像力ではなく，他者の受容によって起こる自己変容，つまり「自己を他者化」する「根源的ストリート化」での復路の想像力によって生まれる．

本書は序章と結章に加えて，起承転結の 20 章からなる本論と総括討論からなる．以下では各章を概観していく．

〈起〉メジャー・ストリートの暴力と排除に抗して―棄民される人々の中へ

1 章においてトム・ギルは，東北地方における原発事故被災者を事例に，支配的な「ふるさと主義」のイデオロギーとそれに対抗するストリートウィズダムの葛藤を報告する．その背景には，放射能汚染による不浄差別と多額の賠償金による妬みの差別という二重のローカリティの意識が存在しながらも新天地に溶け込もうとする人々の姿があった．2 章において飯嶋秀治は，児童養護施設内の暴力

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を事例に，ネオリベ的ストリート化を補完する専門職のみの制度で構成される効率的なルーティーンの遂行とは対照的に，個々の子どもたちの顔に対する自らの存在の関わりに気づくことに「根源的ストリート化」の兆しを見出していく．3 章において田嶌誠一は，同じく児童養護施設等における暴力を事例に，社会の急激な変動によって絶対的な価値が疑われる中で誰しもが共通した価値として共有できるものを明らかにする．それは全ての子どもたちにとっての最優先事項は成長基盤となる安心・安全であり，それは大人たち自身の安心・安全の保証にも連関するものであった．4 章において根本達は，インドにおける反差別運動に取り組む日本人仏教僧の実践を事例に，時に応じて神の力を肯定ないし否定することで，アンベードカルとは異なる「元不可触民の指導者／聖者」となり，自らの脱領土化による狭義の当事者性を獲得していく様を描く．

〈承〉ストリートの表層と内奥の往還―新しい敷居の発見から自覚へ

5 章において近森高明は，ソンビ化するストリート（ストリート性抜きのストリート）の存在論が人間的事象を支えるマテリアルな次元であり，ゾンビ的存在として例外状態に置かれた剥き出しの生こそが敷居を生み出す契機となると言及する．6 章において南博文は，ニューヨークと広島の「道」を事例に，遊歩体験が路面のでこぼこや路傍の石といったアクターの参加と「道」に埋もれた記憶の発掘を生み，それがストリートの開放的契機を取り戻すための「足がかり」になるとする．7 章においてモニカ・ザルツブルンは，パリのサント・マルト地域と東京の都市菜園を事例に，ローカルな社会的ムーブメントによる私的空間から公共空間への変容と象徴的かつ物理的に公共空間を共有することに言及し，「行政公認の計画と住民の創案による占有との間の境界域」（p. 171）に敷居を見出していく．8 章において鈴木晋介は，新潟県長岡市の震災と「かぐらなんばん」を事例に，野菜と人によって紡がれ続ける「生きたローカリティ」の様相を提示する．そこには在来作物に連鎖する非匿名的な人のつながり，「種をつないでいく」という営為そのもの，伝統野菜ムーブメントがもつローカリティの賦活作用が存在したと言及される．9 章において姜竣は，徳島県における漂泊芸能民を事例に，庶民による生活に根ざす関係が美的価値を生み出すさまを明らかにした．そこでは近世社会で周縁化された身分に置かれた彼らが，祭礼での警固権を自らの漂泊性とネットワークを活かして興行権へと変え，興行と儀礼という意味が多義化した人形芝居が国家や市場から自由な芸能のオルタナティブな場を形成していた．10 章において中野歩美は，タール砂漠地域における定住化する放浪民の呪術的実践を事例に，ネガティブなイメージを再帰的に内面化するジョーギーたちへ向けられるアドホックな語りから，彼らの〈賤〉かつ〈聖〉という両義的な「異人性」を生み出し，それこそが彼らの生きる場を創出させていると述べる．11 章において朝日由実子は，カンボジアにおける市場経済化と絹織物業を事例に，新たな社会関係を創発す

る契機としての分業化をみる．そこには高級絹絣織物「ホール」が織り手の分身としての在り方だけではなく，気を遣う近隣者とは異なった，良い距離感をもつ「他者」との純粋な経済利益を生む商品としての在り方という両義性が存在した．12 章において森田良成は，東ティモール国境における密輸を事例に，村人が「国家への忠誠」を表明しつつ国家の承認を受けて活動を続け，問題が発生した際には自らの周辺性を適当に維持し，密輸という生活手段を続けるという日常を保って生き抜くさまを報告する．

〈転〉マイナー・ストリートの創造力―ヘテロトピア・デザインに向かう実践

13 章において関根康正は，インドにおいて関根自身が敷居を発見した体験を踏まえ，排除されてきた貧困者たちによる歩道寺院の設立を事例に，さまざまな環境の偶然を文脈にして他者を取り込む創発の連鎖によって生活空間を自前で構築していくさまを明らかにする．14 章において和崎春日は，ベトナムにおける民衆ストリートが人々全体を結びつけながら社会を生成していくという，ストリートがもつ文化の創発性と自揚性の源泉力を報告する．ハノイのタヒエン通りは逸脱やハズレ現象を当たり前として日常範疇に入れ込んでいくことで周辺化した人々をも受容していく．15 章において小馬徹は，ケニアのストリート言語がもつ他言語やその方言を取り込みながら言語間の差異を融解していく歴史を報告する．その歴史的過程から，蔑視されてきたシェン語が多民族的国家における国民統合の可能性を内包していると推察する．16 章において岸上伸啓は，カナダにおけるイヌイットの新たな生き方の創発を報告する．極北地域においてはネオリベとは真逆の性質をもつ生業捕鯨の復活，南部地域においては多様なアクターとの協働やグローバル化した通信媒体を用いてイヌイット・アイデンティティを維持しているさまを明らかにする．17 章において村松彰子は，東日本大震災期の気仙沼市における公共システムから外れた避難所での生活再建を報告する．琴平神社の宮司である清原正臣氏によって書かれた日誌から，受動的に救援を受ける被災者とは異なり，岩井崎の住民たちは相互扶助による創発のために過去の関係を通した自治・協働を生み出していたと言及する．続いて 18 章において小田亮は，同じく震災後の避難所から「災害ユートピア」という相互扶助について考察する．それはどこにでもみられる真正な社会に異なる関係が積み重ねられていくという創発性をもち，他者を受容して多層的共同体を作り上げていくという実践に「根源的ストリート化」を見出していく．

〈結〉ストリート人類学の要諦―「ネオリベ・ストリート化」から「根源的ストリート化」へ

19 章において西垣有は，『都市的なるものの現在』を起点としたストリート人類学が折り返し地点を通過することで「ストリートへ」から「ストリートから」という問いの拡張と生成変化の過程を辿る．20 章において関根康正は，ロンドンのサナータン寺院建設からヘテロトピア・デザインの実践を考察する．純粋不二一元論に発するサナータンの理

解によって「クリシュナの場」が生まれ，「有」なる自己の放棄を通じた「無」あるいは「空」という受動的能動性が自立的な自己変容のダイナミズムを作り出せるという．続く結章おいて関根は，ストリート人類学の挑戦が「無 1 →有→無 2」という往路から復路への折り返しという時間性を空間論的転回に組み込んだ「ストリート論的転回」以降の人類学実践であると表現する．そして「ネオリベ的ストリート化」を他者との対話を絶った内閉空間化だと喝破し，「根源的ストリート化」を組み込んだ創発的な生き様が，人間の本来の生き様である」（p. 661）と論ずる．総括討論では，まず西垣有は，多岐にわたる各章の議論から近傍や生成変化というひとつの先端からストリート人類学の特徴を挙げる．次に野村雅一は，大道芸人の目線から見たストリートの人類学から，ストリートの人類学を考えるうえでホテル化に抵抗する課題が示唆的であるという．阿部年晴は，近代社会においてストリート化する基礎社会＝後背地が近代文明とは異なる次元の創造性をもち，その世界観と方法の表象としての神話は世界生成を物語る究極の構想力であると述べる．

以上が本書の概要であるが，評者による若干のコメントを付したい．本書の魅力は大きく 2 つある．第一に，編者らが「ストリート」の概念を広義に捉え，極めて多様な地域や研究対象をもって論じられている点である．ここでいう広義の「ストリート」とは，社会の底辺に「排除された」感覚をもつ限界状況に陥る中で自己の力にこだわる自分を放棄し，他者の力を受け取る協働を実践する人々を指す．それは編者自身が最初に着想を得た「顕在的で狭義ストリート・エッジ現象を提供し…ストリート人類学の初学者にとっては格好の研究対象」（p. 18）である歩道寺院のような「路上」という場を意味する狭義のストリートとは射程の広さが異なる．したがって本書は多彩な事例から，ホーム中心の発想をもつ「われわれ」にとって遠い存在であったはずの「ストリート」がいかに〈地続き〉の世界にあるのかを明らかにするものとなっている．第二に，この「ストリート」という概念を軸とした厚い記述によって，編者による人類学の核となる問いに対する応答が試みられている点である．これまでの編者によるインドのハリジャン研究から本書のストリート研究へと展開していく過程で一貫されていたのは，「境界外部的視点」から「境界内部的視点」への移行および徹底された「下からの視点」による脱中心化［関根 1995］であった．この編者の姿勢は，本書における多様な論者による議論の展開をもって「人間が人間として生きるとは何か」（p. 26）という人類学における根源的な問いに対する「自己を他者化する」という応答を導き出すものとなっている．

次に評者が少し気になった点を挙げる．それは本書における広義の「ストリート」という概念が狭義のストリートの現場や，類似したスクウォッター研究の現場にどれほど還元できるのかという点である．具体例として挙げると，編者がストリート人類学の着想を得たとされる 13 章において，歩道寺院に生き

る人々がどこまで生物学的だけではなく社会的に生きる世界を自前で構築できているのかという点においては記述が不十分であるように思われる．スクウォッター研究の観点からいえば，これまでの生物学的に生きるための不法占拠が明らかにされてきた事例［e.g. チャタジー 2015; 上田 2010］とあまり相違がない．確かに歩道寺院の一般的な信仰の記述から宗教的側面がみられるものの，彼らが社会的に生きる世界を自前で構築していく実態としての不法占拠［e.g. 北嶋 2022］については十分に記述されていないと指摘できるだろう．これほど多様な事例に基づいて展開された広義の「ストリート」であるからこそ，編者が着想を得ることができた狭義のストリートあるいはスクウォッター研究などへと再び還元されることを期待したい．

以上，評者の感じた細かな点を挙げたが，本書は編者による極めて根源的かつ示唆的な人類学理論の展開に加えて，各論者による多彩な事例とアジア・アフリカ地域の枠を越えた壮大な地域横断研究としても位置づけられるものである．研究対象や地域を問わず人類学や地域研究を学ぶ全ての人の手に渡ってほしい一冊である．

引　用　文　献

上田　達．2010.「居座る集落，腰掛ける人々―マレーシアの都市集落の事例より」『文化人類学』75(2): 216–237.

北嶋泰周．2022.「フィールドワーク便り かけがえのない居場所―サードプレイスとしての闇市」『アジア・アフリカ地域研究』21(2): 308–313.

関根康正．1995.『ケガレの人類学―南インド・ハリジャンの生活世界』東京大学出版会.

チャタジー，パルタ．2015.『統治される人びとのデモクラシー―サバルタンによる民衆政治についての省察』田辺明生・新部亨子訳，世界思想社.

小林和夫．『奴隷貿易をこえて―西アフリカ・インド綿布・世界経済』名古屋大学出版会，2021 年，326 p.

中尾世治 *

本書は，18 世紀から 19 世紀半ばまでの西アフリカで取引されたインド綿布を中心に，西アフリカの消費者，南アジアの生産者（織工），イギリスとフランスの仲介者（商人）という 3 者の連関の形成を描いている．18 世紀から 19 世紀半ばは，イギリスで産業革命が生じた一方，西アフリカ内陸では大規模なジハード運動（イスラーム国家建設運動）が生じ，沿岸部では大西洋奴隷貿易から「合法的」貿易（奴隷以外の換金作物貿易）への転換が生じた時代であった．この時代の経済史は，かつての従属論や世界システム論では，世界経済の「中心」と「周辺」の形成として論じられてきた．しかし，そのような議論は，「『犠牲者』としてのアフリカ像」の提示に終始し，「アフリカ大陸に住む人々のエージェンシー（行為主体性）」を軽視してきた（pp. 10–13）．そこで，本書では，グローバル・ヒストリー研究を踏まえて，グローバルな局面での相互依存関係の成立と統合として，西アフリカと南アジアの連関を，

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

西アフリカの消費者というエージェンシーに着目して示すことになる．こうした立場が序論で示され，以下，第 1 章から第 4 章，終章の 5 つの章が続く．

第 1 章では，イギリスとフランスの貿易統計を用いて，18 世紀から 19 世紀半ばまでの西アフリカの輸出入を同時代の政治状況とともに概観している．そこではまず，大西洋奴隷貿易が 1787 年のピーク後に衰退し，「合法的」貿易に移行したことが確認される．

「合法的」貿易時代の主要な輸出品は，工業化したヨーロッパで急激に需要を高めた，パームオイル，アラビアゴム，落花生であった．こうした需要の増大に対応して，パームオイルとアラビアゴムの生産のために，急激に衰退した大西洋奴隷貿易に向けられた奴隷が内地での労働力へと転換され，落花生生産では季節労働者が内在的に出現した．

輸入品では，18 世紀から継続して，繊維製品が大きな地位を占めていた．19 世紀になると，イギリス製の綿布も安価な布として流入するようになるが，依然として，インド製の綿布の需要が高く，その大半は染物であった．特に，フランスからセネガルに輸入されたギネ（インド製の藍染綿布）は，19 世紀前半のセネガルの最大の輸入品であった．

モルディヴ産の宝貝はサハラ越え交易によって，すでに西アフリカにもたらされていたが，18 世紀に興隆した大西洋奴隷貿易とともに，沿岸部からも輸入されるようになった．モルディヴ産宝貝は，イギリスの奴隷貿易の廃止後 10 年間は激減したものの，19 世紀前半に急増していった．

まとめると，西アフリカからの輸出ではヨーロッパの需要に対応したアフリカ側の柔軟な反応があり，輸入では，安価であるが質の悪いイギリス製綿布よりもインド製綿布が好まれ，モルディヴ産宝貝の需要が高く，それらが英仏を介して輸入された．つまり，このように「合法的」貿易時代には，輸出入品を介して，ヨーロッパと西アフリカと南アジアの連関を見出すことができる．

第 2 章では，19 世紀前半におけるセネガルのギネの輸入に焦点が絞られる．ギネは染料のインディゴによって日差しなどからの保護の効果があり，身体と布の間の換気に有用であり，それがゆえにセネガルで好まれたという．他方で，ヨーロッパ製の模造品はインド製の藍染による匂いまでは模造できず，セネガルの消費者に好まれなかった．さらに，藍染綿布の着用は富の象徴としての顕示的消費のひとつであった．これらがギネの強い需要を生じさせたとする．

ギネの輸入は，多くの仲介商人のネットワークによって可能となっていた．南インドの仏領ポンディシェリでつくられたギネは，フランス商人によって一度，フランスに送られた後，セネガルへと再輸出された．サンルイに運ばれたギネは，仲介商人に信用貸しされ，仲介商人はそれに見合ったアラビアゴムを，セネガル川下流域の住民から仕入れていた．また，ギネは貨幣としても用いられていた．西アフリカではギネの到来以前から綿布の生産がなされ，布を貨幣として用いる慣行が存在していた．ところが，17 世紀から 19 世紀半ばにかけてセネガル川下流域では乾

燥化が生じ，ワタの栽培が困難になり，安定的に輸入されるギネが西アフリカで生産される綿布にかわった新たな布貨となりえたとする．

第 3 章では，舞台はインドに転じ，西アフリカ向けのインド綿布の生産と，ヨーロッパによるインド綿布の調達・確保が論じられる．18 世紀後半，イギリスや海外市場向けの各種綿布の需要は，イギリス東インド会社を通じてインドに伝えられていた．しかし，自然災害や政治経済的な要因によって，商品調達は不安定なものであった．そこで，18 世紀後半から東インド会社は，インド人仲介者を排除して，織工を直接管理しようとした．しかし，織工にインセンティブを適切に与えられず，イギリスの綿工業の発展とインド綿布のイギリスへの輸入阻止などのロビー活動もあって，東インド会社は南インドに投資を十分におこなうことができなかった．他方でフランスは，19 世紀初頭，ポンディシェリの返還後に，公営の作業場の建設，民間企業家による繊維産業への投資の奨励，蒸気機関を備えた紡績機の導入をおこない，ポンディシェリの綿布生産を飛躍的に増加させた．ギネの輸入の急増は，こうしたヨーロッパでの政治経済的な変動と結びついていたインドでの供給側の状況とも連関していたとされる．

第 4 章では，18 世紀から 19 世紀前半にかけての西アフリカへのインド製綿布の輸送を支えた英仏の商人をとりあげている．1813 年までは，イギリス東インド会社がインド貿易を独占しており，家族経営の奴隷商人たちがインド綿布を東インド会社から仕入れ，別の奴隷商人たちに供給することで西アフリカへと輸出していた．奴隷貿易廃止後，一部の奴隷商人たちは「合法的」貿易へと転換し，東インド会社の独占が廃止された 1813 年以降はさまざまな商人がインド製綿布の貿易に参入した．しかし，イギリス繊維産業の工業化とそれに伴うロビー活動によって，イギリス全体のインド製綿布の輸入量は低下し，西アフリカへのインド製綿布の輸出も低下していった．

他方で，19 世紀前半，フランスからセネガルへのギネの輸出は増加していた．このフランスの西アフリカ貿易を担ったのが，イギリスと同様に家族経営によるボルドーとマルセイユの商人たちであった．特にボルドーの商人は，マルセイユの商人を排除するための特権組合をフランス国内でのロビー活動を通じてつくりあげ，仲介者を排して，直接的にアラビアゴムを仕入れることで，セネガル川下流域を中心としたゴム貿易とギネの輸送によって主導的な地位を確立するにいたった．

終章では，以上の論述を経済史研究のより広い文脈に位置づけなおしている．まず，19 世紀の熱帯地域における経済発展の研究を引きつつ，パームオイルや落花生などの外部からの一次産品需要とそれに伴う所得獲得の機会に西アフリカの生産者が主体的に反応したことで，19 世紀の西アフリカは貿易主導の経済成長をとげたとする．

つぎに，これまでの帝国史とグローバル・ヒストリー研究が，「周辺」の利害関係が地理的に離れた社会に与えた影響に無関心で

あったという先行研究の指摘を確認する．この点で，セネガルにおけるギネの強い需要がポンディシェリの繊維産業の発展を導いたとし，これが「工業化の時代における非ヨーロッパ製品のグローバルな生存」（p. 249）という今後の研究アジェンダにつながるとする．そして，最後に，多元的グローバル化として，西アフリカと南アジアの連関がギネと宝貝に見出すことができるとしている．

本書の最大の貢献は，インド製綿布の貿易に関連する一次資料を用いて，イギリスとフランスの商人を媒介とした西アフリカと南アジアの連関を明らかにしたという点にある．西アフリカ沿岸部で奴隷，あるいはパームオイルやアラビアゴムなどの入手のために，西アフリカで需要の高かったインド製綿布を輸出する必要があったこと，特に西アフリカの消費者が綿布の品質に大きな関心をもっていたことを明らかにしたことは，西アフリカの消費者のエージェンシーを明解に示している．

また，本書は西アフリカの「合法的」貿易についての概観とともに，脚注に最新の研究を含む膨大な先行研究を明示しており，異分野の研究者や初学者にとって，この分野の研究の現状を知るための基盤を提供している．

もちろん，本書にもいくつかの問題点は指摘できる．たとえば，第 1 章で同時代の西アフリカのジハード運動をまとめているが，ソコト・カリフ国による沿岸後背地への奴隷の供給という点以外は論旨にはほとんど関連していない．また，肝心の西アフリカの消費者がどのような人々であったのかは具体的に述べられておらず，ギネの選好の理由も日差しからの保護や顕示的消費などの一般論にとどまっている．西アフリカの人々のエージェンシーは，西アフリカの諸社会のなかでの意義についてはほとんど検討されず，ヨーロッパ商人への影響という点でしか感知されていない．

とはいえ，これらはグローバルな連関に焦点をあてた本書には無い物ねだりだろう．むしろ，ローカルな歴史を対象とする研究者が本書のようなグローバル・ヒストリー研究の成果を学び，こうした研究者と連携して，グローバルとローカル双方の視点を踏まえた論点を深めることが求められている．評者には，このことが本書から強く感じられた．

服部志帆編.『霊長類学者 川村俊蔵のフィールドノート—1950 年代屋久島の猟師と後継者たち』南方新社，2021 年，389 p.

大坂桃子 *

フィールドワーカーが調査現場で得た情報を記録したものを，フィールドノートという．本書は，日本の霊長類学のパイオニアのひとりである川村俊蔵（1927–2003 年）が，1952 年と 1953 年にニホンザルの調査地と実験用サルの供給地開拓のために鹿児島県本土の南方に位置する屋久島を訪れた際のフィールドノート（以下，川村ノートとする）を読み解いたものである．のちに屋久島は，霊長類研究の世界的拠点となり，現在に

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

至るまで数多くの重要な研究が蓄積されてきた．その第一歩となった 70 年前の記録，計 5 万 4,691 字の解読に挑み，それをとおして，川村が当時屋久島の自然や人々とどう向き合ったのか，さらには当時の屋久島の自然のあり様や，自然と深く関わる人々がどう生きたかまでをも描き出したのが本書である．

本書は，第 1 章「川村俊蔵のフィールドノートの全容―サル・民俗知識・方法論・生態人類学に関する一考察」と第 2 章「後継者の語る 1950 年代の屋久島と野生動物―猟師はどのような人々であったか」の 2 章で構成されている．各章には，資料として，著者である服部志帆氏と小泉都氏によって解読された川村ノートの内容，および，50 年前に川村が聞き取りをおこなった猟師たちの後継者に対する著者と小泉氏のインタビュー録が掲載されている．

第 1 章では，まず川村ノートの全容が示される．川村の調査は，同じく日本の霊長類学のパイオニアのひとりである伊谷純一郎（1926–2001 年）とともにおこなわれた．サルを観察する機会には十分恵まれなかった中で，聞き取り調査や猟に関する野外調査がメインとなっている．情報提供者は 40 人で，多くが猟師であった．記録された内容は，サルの社会，生態に関することから，サルに関する方言，猿害，猟や利用法に至るまで，多岐にわたる．それらの内容をもとに，著者は 4 つの考察をおこなっている．

第一に，ヤクシマザルの社会，生態についての考察である．川村・伊谷は，人為的な森林の分断化が進みつつあった本州や九州では見られない連続した森が屋久島には存在していることに注目し，そこでの群れの特徴や連続性，テリトリアリティ，群れ間関係等に関心をもっていた．猟師の語りから，そうしたヤクシマザルの社会，生態に対する多くの民族動物学的知見が得られたことが示されている．第二に 1950 年代の猟師の民俗知識とその背景についてである．屋久島の猟師は，それぞれが利用する慣習的猟区において，その地域のサルに対する詳細な知識をもっていた．その背景となったのは，古くからのサルの食用・薬用利用に加え，動物園や実験用サルの供給といったサルに対する島外からの高い需要であったと論じられている．

第三に，川村の方法論についてである．著者は，川村がもつ野生動物と人との関わりへの広い関心が土台となって，「研究対象やテーマに限らない多様な情報を異なる立場の人たちに聞く」（p. 106）という川村の方法論が確立されたことを指摘している．そして，自然保護や野生動物との軋轢等にまつわる問題を多く抱えた現代において，こうした人と野生動物との関わりを相対化する視点に満ちた方法論は，より重要であると主張している．さらに第四の考察として，そうした川村ノートにみられる「霊長類学の関心を軸にしながらも，自然と人間の関係の諸相をつぶさに記録する」（p. 108）という生態人類学的アプローチが，当時“人類学を専門としない”研究者によって黎明期を迎えていた生態人類学の自由で闊達な風潮に刺激され生み出されたものであることを指摘している．また，そうした学問的刺激に加え，川村が，

屋久島の猟師と「動物のことがおもしろくてたまらない」（p. 109）という感覚を共有していたことで，猟師への関心や尊敬とそれに基づく生態人類学的なものの見方に結び付いたと論じている．

続いて第2章では，川村ノートの分析だけでは明らかにならなかった狩猟活動の詳細や地域社会における猟師の位置づけ等について明らかにするため，川村ノートに登場した猟師の親族や知人・本人44名に対して服部氏・小泉氏がおこなった聞き取り調査の結果とその考察を示している．

後継者による語りからは，まず慣習的な猟区や猟期と狩猟規則，猟法，捕獲数などといった狩猟活動の詳細が明らかになる．猟師たちが，集落ごとの猟区内にそれぞれのなわばりをもち，個別に猟具（主にワナ）を工夫しながら猟をおこなっていた様子をうかがい知ることができる．続いて，食用や薬用としての野生動物利用や，野生動物の販売実態についての語りが取り上げられ，川村・伊谷が始めた京都大学への実験用サルの供給事業が，1950年代から1960年代後半にかけて大きな経済的利益を生み出していたことが指摘される．また，猟師が山に対するそれぞれの信仰に基づいて儀礼をおこなっていたことや，屋久島ではサルや猟に対する禁忌が存在していたことが明かされる．

著者は，こうした語りから，屋久島の集落において，猟師が多面的かつ異質な存在であった様を浮かび上がらせている．第一に，猟師は嫉妬や羨望の的であった．それは，猟師が戦後の食糧難の時代にタンパク源を入手しやすい立場だったのみならず，戦時中から軍用として使われたイタチの毛皮への需要や，前述した京都大学やその他動物園等の生きたサルへの需要によって，1960年代後半頃まで島外との取引から多額の収入を得ていたことに起因すると論じている．一方で，猟師は野生動物が畑に侵入するのを防いだり，山林の監視役として森林資源を採取しようとする侵入者を防いだりといった，外敵から集落を守る役割も担っており，頼りになる存在としての一面ももっていたと指摘している．また，さらに猟師を異質な存在にした要因として，猟師がもつ野生動物に関する豊富な経験や知識と，神や物の怪がいる聖域である山に入っていくことへの畏怖の念があったと論じている．そして，こうした畏怖や嫉妬・羨望などが，屋久島の猟に対する禁忌に結び付いたと推測した．

また著者は，屋久島の猟師に島外出身者やその子孫が多い点にも注目している．そして，1950年代の猟師の社会的位置づけに対するまとめとして，よそ者である猟師たちが屋久島の山を舞台に活躍できたのは，①島内外からの野生動物に対する高い需要によって，猟師が生活基盤を築けたこと，および，②集落の多くの人々にとって，その険しい自然環境故に簡単にアクセスできない場であった奥山で，野生動物や侵入者から集落の畑や山林を防御する猟師の存在が必要とされたことの2点が大きな理由になったと論じている．

以上が本書の概要であるが，ここからは評者の立場から，いくつかのコメントを述べたい．

まず本書の魅力的な点は，川村ノートに記された情報を細部に至るまで丁寧に読み解き，さらに著者や研究協力者による聞き取り調査によってそれらの情報を補完したことで，1950 年代における屋久島の猟師の生き様を見事に描き出した点である．川村の関心の広さを反映して，川村ノートの情報は非常に多岐にわたったが，著者はそれら膨大な情報を解読し，ひとつひとつ丁寧に分類し，自ら得た情報と合わせてそれぞれの因果関係を位置づけ，全体を描き出すことに成功している．これは，単にフィールドノートの内容を機械的にテキスト分析するだけでは得られなかった成果であり，本研究の優れた特徴である．著者は，川村が猟師たちを尊敬し，同時に猟師たちに魅了されていたと述べているが，著者自身も同様に，川村ノートを通じて出会った川村・伊谷や屋久島の猟師たちに魅了されていたのではないかと考えられる．そうした著者の姿勢が，本書の挑戦的な試みを可能にしたのではないか．

また，1950 年代に“よそ者”的存在であった猟師の社会的立場を鋭く描き出している点も興味深い．屋久島において，現在も移住者は地元の人間と区別されており，集落社会において異質な存在としての側面を保持し続けていると同時に，少子高齢化が進む集落社会の活性化に向けて期待される存在でもある．こうした“よそ者”の位置づけは，島外との関係やそれを受けた島内の経済状況，島民と自然との関わりの変容といった，その時代の屋久島という地域がもつ文脈を最も鋭く切り取っており，大変重要であると考える．

一方で，俗に「海に 10 日，山に 10 日，里に 10 日」（p. 325）といわれていたほど島民が多様な生業をもっていた屋久島において，猟師の異質性に対するより詳細な検討をおこなう余地があるように思われる．それによって，本書の到達点からさらに議論を深めることができるだろう．評者は自身の調査の中で，屋久島の農家が，子どもの頃から遊んできた山での経験や今では地図にない山中の地名，素潜り漁の中で身につけた海中の地形や魚の習性に関する知識等について豊かに語る姿を目の当たりにしてきた．その中で，屋久島の人々が軽やかに生業を乗り越えながら，驚くほど豊かな自然環境にまつわる経験や知識を蓄えていることを実感してきた．このように，本書で描かれてきた屋久島の猟師のあり様について，狩猟以外の生業にも視野を広げ，狩猟を生業とすることに由来する部分と，屋久島全体に共通する自然との距離の近さに由来する部分のグラデーションをさらに検討することで，猟師の異質性や屋久島という地域のおもしろさがより際立つ可能性がある．

また，屋久島における現代の狩猟は，野生動物による農作物被害・生活被害対策としての有害駆除という側面を強くもつようになった．こうした新たな狩猟に対する需要との関わりの中で，70 年前の屋久島に描かれた猟師の経験的な知識や狩猟のあり方，猟師の社会的位置づけがどう変容していったのかを問うことは，現代的な人と野生動物との間の問題解決のために非常に重要である．評者自身の課題であるという意味も込めて，現在の屋

久島における狩猟研究が新たな重要性をもって展開することを期待したい．

田中雅一・石井美保・山本達也編．『インド・剥き出しの世界』春風社，2021年，456 p.

菅野美佐子 *

本書は，南アジア各地で生起するあらゆる形の暴力と，それに晒される人々の被傷性を，22名のフィールドワーカーが目撃し，共感し，熟思し，その経験を書き綴ったエスノグラフィーである．タイトルにふくまれる「剥き出し」が強烈な存在感を放つように，本書には中絶，誘拐，老衰，差別，暴行，レイプ，殺人，自殺といった南アジア社会の厳しい現実を突きつけるようなキーワードが散りばめられている．だが，それぞれの書き手が織りなす民族誌には，圧倒的な暴力を眼前にした人々の悲傷や恐怖，絶望だけでなく，そこからの回復や希望の営為も描かれることで，読み手はそれぞれの物語に次第に引き込まれていくのである．

剥き出しの世界と「愛」の所在

序章「インド・剥き出しの世界にむけて」（田中雅一）では，唐突にアガンベンの思想と園子温の世界観が，本書を貫く問題意識の軸として登場する．この導入に最初は戸惑いを隠せないのだが，本書を読み進めるにつれて，一見ちぐはぐな2つの視角がどことなく重なりあう瞬間が垣間見えてくる．アガンベンが想定する「ホモ・サケル（聖なる人間）」は，法的保護から投げ出されるがゆえに殺されても誰も殺人の罪に問われず，しかし祭儀上の犠牲として意味のある死を遂げることも許されない［アガンベン 2003］．そこにあるのは意味のある世界（ポリス）から追放され，ただ生きているだけの無機質な生（ゾーエー）である．他方，園子温監督の映画『愛のむきだし』では，行き過ぎた愛の形が暴力的に立ちあらわれ，生の形式としてのビオスと暴力に剥き出しにされたゾーエーの間で，「液状化した生」とでもいうような激しい生きざまが滑稽に描き出される．本書において，この作品が引用されるのは，日本のある家族の一場面を見れば，剥き出しにされた人々の受苦や愛の経験が，南アジア社会のみでなく，この世界のあらゆる景色に遍在していることを読者に納得させるためであろう．ロシアによるウクライナ侵攻の犠牲者たち，アメリカにおける中絶禁止法やブラック・ライブズ・マターにみる差別や暴力，ロヒンギャやクルド人など政治的圧力によって増える難民，そして日本ではコロナ禍で増加する生活困窮者や，超高齢社会のなかでケアから取り残される高齢者たち．田中がアガンベンの言葉を引用して，われわれ誰しもが「潜在的にはホモ・サケル」であると示唆するように（p. 9），人間はみな被傷性を帯びた存在であることを想起させることで，南アジア社会への共感を呼び起こす仕掛けが施されているといえる．

* 青山学院大学

本書の構成

ここで本書の構成と評者の所感を述べておこう．本書は 3 部仕立てで構成され，序章を除いた 15 本の論文と 6 つのコラムが収録されている．第 1 部「人生とジェンダー」では人生の各ステージで剥き出しにされる生のありようが描き出され，以下の 5 本の論文と 3 つのコラムで構成される．第 1 章「日常世界における被傷性―リプロダクションの管理としての人工妊娠中絶」（松尾瑞穂），第 2 章「子どもの生は誰が守るのか―バングラデシュの共同体の狭間で生きる子どもたち」（南出和余），第 3 章「〈剥き出しの生〉が媒介する共同性―スリランカの老人居住施設における老いと看取りの現場から考える」（中村沙絵），第 4 章「殺人という特権―パキスタンの名誉殺人」（サイード・フォージア，和崎聖日訳），第 5 章「女性への暴力，売春，デーヴァダーシー」（田中雅一），コラム「守られる名誉, 消費される名誉」（須永恵美子），コラム「病死か自死か他殺か」（安念真衣子），コラム「君の名は」（山崎浩平）．

第 2 部の「集合的暴力と差別」ではカースト，宗教，業種など特定の社会集団に対して向けられる敵意，差別，排除といった幾多の暴力の場景が，それぞれのフィールドから切り取られる．収録論文およびコラムは以下のとおりである．第 6 章「『まなざし』を超えて―『不可触民』をめぐる暴力の位相」（舟橋健太），第 7 章「流動化する暴力とヒンドゥー・ナショナリズム」（石井美保），第 8 章「災害復興と宗教的マイノリティ―二〇〇一年インド西部地震の事例より」（金谷美和），第 9 章「剥き出しの屠りと匿名的な屠畜者たち―現代ブータンにみる屠畜規制と拡大する放生実践」（宮本万里），第 10 章「ネパール・チトワンにおける森林伐採事件―例外状態としての森林と先住民チェパン」（橘健一），コラム「階層間関係の不安定化」（中屋敷千尋），コラム「カースト・カテゴリーの境界を生きるということ」（岩谷彩子）．

第 3 部の「国家と紛争」では，主に，暴力によって大切な家族や隣人の命を奪われた人々の悲しみや苦悩からの回復の実践が，以下のような章立てで描かれる．第 11 章「戦争犯罪者をめぐる今日の歴史問題―バングラデシュの独立戦争と国際戦争犯罪法廷の裁判記録から」（外川昌彦），第 12 章「暴力と忘却―ネパール内戦下の生活と死者，強制失踪者」（藤倉達郎），第 13 章「かけがえのない死を悼む―内戦後のスリランカ東沿岸部タミル村落の事例から」（菊池真理），第 14 章「性暴力に抗して―メイテイ女性による『裸の抗議』」（木村真希子），第 15 章「暴力を目の前にした難民の苦境を考える―インド在住チベット難民と焼身自殺」（山本達也），コラム「踊り子たちの『結婚』事情」（飯田玲子）．

どの章（およびコラム）も，フィールドワーカーとして現地社会と長く深く関わり，その土地の人々との強い結びつきがなければ描くことのできない，生々しく，痛々しくも，真に迫るエスノグラフィーとなっている．一方で，それぞれの論文があつかう地域や人，テーマがあまりにも多種多様であるため，一見すると混沌としてまとまりの悪さを感じる．だがある章の事例や議論が別の章のそれ

と，ふとつながる瞬間があり，3 部構成の枠を超えて，互いの論考が呼応しあいながら，全体として南アジア社会の剥き出しの世界を表現していることが理解される．たとえば，第 3 章（中村）では老い衰え死へと向かう老女の身体を前に，「自分もいつかはこうなる」という内なる他者に気づき，悲しみ，傷つくケアワーカーの被傷性は，そのこと自体がホームの入居者に対するケアの動機づけとなる様子が描かれる．これは，第 15 章（山本）における同胞の焼身自殺を目撃したチベット難民が，燃え盛る炎に焼かれる身体の被傷性を突きつけられ，それを誰か（ここでは著者である山本）に語らずにはいられない衝動へと駆り立てられる恐怖や悲しみの経験と連動している．また，第 14 章（木村）のマニプル女性たちの治安部隊による度重なるレイプへの「裸の抗議」は，第 4 章（サイード）や第 5 章（田中）に示されるパキスタンやインドや日本の女性の清廉潔白な身体の称揚と対比して捉えることができる．さらに身体にふりかかるスティグマの「ずらし」による差別的・侮蔑的な「まなざし」の回避という実践は，第 6 章（舟橋）のダリトたちの「名乗り」によるスティグマの撹乱や第 13 章（菊池）における身内の死の理由を内戦中の殉死へと書き換える行為に共通してみられる．このような各主題と事例の散漫さと一致性が，南アジア社会をより広く，より深く理解する効果をもたらしているといえよう．

剥き出しの世界と人類学

以上のように，多様で混交的な主題と事例に彩られた本書だが，全ての著者に共通する目論みは，南アジア社会の「闇の奥」に潜む社会や文化の亀裂・崩壊とでもいうべき出来事や状況を議論の俎上に載せることである（p. 18）．このような企てには，人類学がこれまで避けて通るか，果敢にも試みて失敗してきた歴史がある.[1] すなわち，人類学は当該社会にみられる「有害な文化実践」（p. 15）を文化相対主義やオリエンタリズム批判に立脚して尊重することで，その実践が包摂する有害性を容認してきたのである．田中は序章において有害である文化を「問題」と同定し，「尊重」はすなわち「無関与」であるという批判的立場から，あえて「問題」に対峙することを表明する．フィールドでは「抑圧的で野蛮な文化にさらされた人々」（ゾーエー）と「彼らを救済する人類学者」（ビオス）という構図ではなく，フィールドワークをとおしてその境界が曖昧になり，人類学者自身がゾーエーを経験する局面が存在し，そこに人類学が文化的・社会的な「問題」に関与する可能性が拓かれるとしている．

評者はこの可能性に期待を寄せながら本書を読み進めた．評者自身，長きに渡ってインドの低階層の女性たちを対象としたフィールドワークを行なっており，夫や家族からの暴力により心身ともに傷つき，新自由主義経済のもとでの暴力的な貧困にさらされる人たちを目の当たりにしてきた．しかし厄介なの

1)「失敗」という見解はあくまで評者の期待を基準とした場合の所感であり，そのような試みそのものは学術的に高い評価を受けている研究も散見される．

は，現地社会の暴力的状況をどのように記述すべきかがきわめて難しいことである．彼女たちの困窮状態や暴力の経験を「悲しみ」や「哀れみ」という共感から，あるいはもっと明確に「問題」として記述すればオリエンタリズムの称揚となり，他方，自らに向けられる「抑圧」のベクトルを躱したりずらしながら日々をたくましく生きる当事者のエイジェンシーを記述すれば，暴力を包摂する抑圧の構造を黙認することになるからである．つまり，どの立場からの記述を試みても諸刃の剣とならざるを得ないのである．

本書を読み進めての結論としては，この難題への明確な答えを示すものではなかった．つまり，本書では，南アジア社会の問題群をここまでは明らかにしたが，「問題含みの残酷な社会とみるのか，現地の人々のエイジェンシーに希望を見出し，社会や文化の暴力性にはひとまず目を瞑るのか，その先をどう考えるのかはあなたたち次第ですよ」と，事象に対する責任の所在が書き手から読み手に転嫁されているように感じたのである．人類学はこの命題をはたして乗り越えられるのか，あるいは乗り越えずにこの定位置を保持すべきなのか，評者自身が今一度考えさせられる契機を与えられたようにも思う．

引 用 文 献

アガンベン・ジョルジョ．2003.『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生』高橋和巳訳，以文社.

下條尚志.『国家の「余白」—メコンデルタ 生き残りの社会史』京都大学学術出版会，2021 年，570 p.

今村真央 *

「脱植民地化のなかで生じた長期の戦争や，国家政策に起因する政治経済的混乱」に巻き込まれた人々はいかにして生き残ったのか（p. 5）．筆者は現ベトナム南部メコンデルタを対象に，この問いを追求し，明確な答えを提示している．それは「『国家の介入しにくい空間』（p. 52）を創り出してゆく」（p. 6）というものだ．より具体的には，「家や屋敷地，寺院，精米所や闇市といった空間」（p. 504）である．このような空間を，筆者は「国家の『余白』」と呼び，そこでは「国家秩序とは異なるローカルな秩序の原理が働」いたと主張している（p. 66）．

本書の強みはまず，南ベトナムでの現地調査から筆者自身が直接入手したデータの質と量にある．下條は，人口約 15,000 人の村落（ソクチャン省フータン社）に住み込み，長期フィールドワークを実施した．「ベトナム南部の一村落で一年以上の住み込み調査を実現したのは，ベトナム戦争終結以来，おそらく筆者が初めて」（p. 23）であり，本書にはオリジナルなデータが満ちている．ベトナム南部の多民族社会でベトナム語とクメール語を駆使して無数の聞き取りを実現した著者の能力に評者は圧倒された．

下條は，精力的な聞き取りに基づいたオー

* 山形大学人文社会科学部

ラル・ヒストリーを編み上げると同時に，その内容を地方雑誌や統計資料を含めた膨大な文字史料に照らし合わせることで，重厚な研究書をまとめあげた．「社会史」と名付けられているものの，筆者の狙いは時系列の物語を提供することではない．歴史学と人類学の手法を柔軟に組み合わせ，多様なトピックを論じている．トピックごとに先行研究を検討し，自身の調査を大きな学術的系譜と接合している様に筆者の高い研究能力が表れている．

また，20 世紀後半を対象にしているという点も本書の強みである．近年，統治の度合いが低い空間―「非国家空間」「周縁」「余白」「フロンティア」といった語で表される―に焦点を当てた研究が目覚ましいが，その大半は国民国家形成以前の状況を論じたものであり，20 世紀後半を詳細に論じる単著は希少だ．

すでに国際開発研究と大平正芳記念賞を受賞しているという事実が示すとおり，本書は高い評価を受けている．多くの選評や書評もすでに発表されていることから，この書評では本書の章ごとの内容紹介などは割愛し，評者の批評を積極的に提示することで，議論のさらなる広がりに貢献したい．ここでは「国家の介入しにくい空間」と「生き残り策」の比較研究に向けて筆者にひとつの問いを投げかけたい．それは「ローカル」についての問いになる．

本書において「ローカルな秩序」が中核的なキーワードであることは明らかだ．この表現は第 9 章「社会主義改造下のローカルな秩序」および終章第 6 節「近代国家の弱さとローカルな秩序の強さ」のタイトルにも用いられている．下條によれば，国家の失敗は「ローカルな秩序を把握することができなかった」（p. 513）ことであり，学術研究においてもこれまで「ローカルな秩序体系が十分に解きほぐされない」（p. 519）と指摘されている．しかし，本書全体において「ローカル」がどのような分析・分類概念として使われているかは必ずしも明瞭ではない．

まず本書において「ローカル」がいかなる意味で用いられているかを確認しよう．この語は主に 2 つの意味で用いられていると見受けられる．まずひとつは，「その地に限定される特有の」「局所的・局地的」「在地的」という意味だ．本書では「ここの地域社会に内在する…ローカルな秩序体系」（p. 519）といった表現が用いられている．下條が「ローカルな秩序は特に寺院で顕著に生成されており」と語るとき，「ローカル」は「その場所に限定された」という意味で使われているようだ．英語の人文地理学の用語であれば「place-based」といった用語がより適切かもしれない．この意味での「ローカル」と対立するのは，「移動できる」「動かせる」「流動的」―英語であれば「mobile」―といった語になるだろう．

同時に本書において「ローカル」は「小規模の」という意味でもたびたび使われている．筆者は「ローカル」を「ナショナルかつグローバルな次元」や「ナショナルかつグローバルな規模」としばしば対比している（pp. 519–520）．「ミクロな地域社会」（p. 36）に焦点を当てる「ローカルで微視的」

（pp. 519–520）な調査を下條が奨励するとき，「ローカル」という語は，「グローバル」や「マクロ」に対立する，スケールの概念として用いられている．つまり，本書で「ローカル」という語は主に，「局地的」と「小規模空間」という 2 つの意味で用いられている．

しかし，本書ではこの 2 つに反するような意味で「ローカル」が使われることもある．人々の移動にも，そして大規模な現象にも，「ローカル」という語が用いられるということだ．たとえば，筆者は「カンボジアへ越境移動することは，生き残り策のひとつとして慣例化してきた」（p. 501）と指摘し，人々が「国境を超えた広域空間のなかを移動し…ローカルな秩序を再編成してきた」とある（p. 500）．また，下條によれば，「国家の力が及びにくい空間が無数に拡がり，戦死を恐れた人々はそれを隠れ蓑として利用するようになっていた」（p. 326）．そして，「国家は…国境を超えた規模で際限なく拡大していったローカルな秩序を制御できず，次第にそれを黙認，容認していくようになっていった」（p. 514）．つまり「国家の介入しにくい空間」は「ローカル」でありながらも拡大・増加すると筆者は説明しているわけだが，無制限に拡大する空間現象をはたして「ローカル」と呼ぶべきだろうか．[1)]

本書では議論の展開とともに「ローカル」の意味が横滑りし，その指示対象がどんどん広がっていないだろうか．最終的に「ローカルな秩序」はあまりにも多種多様な現象を含む，キャッチオール的な範疇になってしまっていないだろうか．本書は，ナショナルやグローバルな見方に対して警鐘を鳴らし，ローカルへの眼差しを繰り返し奨励しているが，グローバルを対象にする民族誌にもすでに蓄積がある［Marcus 1995; Tsing 2011］今日，筆者がなぜ「ローカル」をそこまで持ち上げられるのかが評者には理解できなかった．

下條は，寺院も「ローカルな秩序」として分析しているが，上座部仏教の寺院ネットワークを「ローカル」の範疇に収めることは難しいだろう．仏教のような世界宗教こそローカルを超える現象であり，各寺院レベルでの機能を仏教の超ローカル性から切り離して分析することはできるのかという点で説明がほしい．寺院という空間に逃げ込む人々には，仏教寺院をとおしてローカルを超えることを望んでいる，という側面があるのではないだろうか．[2)]

筆者は生態的条件よりも社会関係や文化制度に注目し，「国家の介入しにくい空間」は「地域社会の家族やごく近しい親族，地縁，上座仏教徒間の紐帯，米取引関係といった緩やかな人間関係の連鎖」によって維持されてきたと説明している（p. 504）．[3)] 人間が維持している「国家の介入しにくい空間」は，人の移動とともに移動できるというのが筆者の

1）「地域」もまた精査が必要な用語だ．本書では，「ローカル」と「地域」が同義で使われていることもあるが，意味が異なっているときもある．「地域」の語用について評者が先行研究に明るくないこともあり，この書評では掘り下げることができなかった．

2）「秩序」についての説明がない点も評者は気になった．「秩序」よりも「制度」の方が先行研究とつながる議論になったかもしれない．

認識だろう．しかし，そのような認識であれば，属地的概念よりも属人的概念を用いる方が分析の焦点がより明瞭になったかもしれない．

文化人類学では，1990年代にグプタとファーグソンが，「フィールド」や「ローカル」などさまざまな空間的用語を俎上にあげて，これらの概念は実のところ安易な前提に依存していることを鋭く指摘した［Gupta and Ferguson 1997a, 1997b］.[4] これらの批判を受けて，英語圏ではその後「local（ローカル）」という空間的概念よりも「vernacular（民俗語）」という言語学の語が比喩として盛んに用いられるようになったと評者は理解している．「ローカル」は属地的現象を指す語だが，「vernacular（民俗語）」は属人的な特性や能力を表せる語だ．生態を語るうえでは地理的概念の方が適しているだろうが，制度や行為など属人的な現象を論じるうえでは言語学的概念の方が有効だろう.[5]

実のところ評者は，脱ローカル的現象の描写にこそ本書の魅力を感じた．本書の主な舞台は「フータン」と呼ばれるベトナム南部ソクチャン省の町であるが，筆者はこの町のみならず，複数の場所でフィールドワークを実施した．「ソクチャン省の他地域やメコンデルタのカンボジア国境地域，またフータン社の人々の主要な移住先の一つである隣国カンボジアの首都プノンペンなどを訪問して出会った人々に聞き取りを行い，可能なかぎり広域的な観点から」現地調査を進めた（p. 22）．この調査をとおして，複数の場所が相互につながっていることを明らかにしている．本書はすでに「ローカル」を超える研究を実践しているのだ．

メコンデルタの人々の生き残りほど，さまざまな空間的枠組みを組み合わせるオーラルヒストリーの対象にふさわしいトピックはないかもしれない．ベトナムから夥しい数の人がいわゆる「ボート・ピープル」および「ランド・ピープル」として国外脱出を計ったことは広く知られている．マレーシア，タイ，フィリピン，インドネシアなど東南アジア各地に難民キャンプが設置され，最終的に数百万におよぶインドシナ難民が，香港，日本，イギリス，ドイツ，フランス，カナダ，オーストラリア，アメリカにたどり着いた［UNHCR 2000］．下條も，調査地でもボート・ピープルの例があったことを指摘している（pp. 404–405）．長距離移動の体験を理解するうえでは，多くの場所をつなげるとともに，微視的と巨視的な視点を組み合わせる研究が必要となるはずだ．下條は本書で，ニコラス・トーマスと杉島敬志を引いて，「小さ

3）「ローカルな秩序」を強調する本書に生態環境の議論がないことが評者には意外であった．本書ではスコットのゾミア論は触れているが（p. 35, p. 54），メコンデルタの地形，気候，生態，水域がつくる非国家空間論―「水のゾミア」―は掘り下げて論じられていない．メコンデルタの「国家の介入しにくい空間」形成において地勢や気候や生態は大きな要因ではないと考えて良いのだろうか．

4）東南アジア研究では，自然環境論の文脈で Lebel *et al.*［2004］も「ローカル」主義を分析している．Lebel *et al.*［2005］は，scale, position, place という3つの空間概念を整理していて有用である．

5）日本語での「ヴァナキュラー」論には往々にして言語学的視点が抜けていることが多いが，小長谷英代［2017］が例外的に重厚な分析を提供している．

な歴史」と「大きな歴史」の「もつれあい」に注目することを促している（p. 491–492）が，時間的スケールのみならず，空間的スケールにおいてもミクロとマクロのもつれあいがある．

日本でも，世界のさまざまな地域にルーツをもつ人々が隣人として暮らしている今日，静的な空間的枠組みに縛られない研究がますます求められている．ベトナム研究者にこそ，新たなフィールドワーク論と地域研究の方法を切り開く機会が訪れているともいえるだろう．本書で卓越した調査能力と筆力を示した筆者に期待するのは評者だけではない．

引 用 文 献

Gupta, Akhil and James Ferguson, eds. 1997a. *Anthropological Locations: Boundaries and Grounds of a Field Science*. Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press.

_____. 1997b. *Culture, Power, Place: Explorations in Critical Anthropology*. Durham & London: Duke University Press.

Lebel, Louis, Antonio Contreras, Suparb Pasong and Po Garden. 2004. Nobody Knows Best: Alternative Perspectives on Forest Management and Governance in Southeast Asia, *International Environmental Agreements* 4(2): 111–127.

Lebel, Louis, Po Garden and Masao Imamura. 2005. The Politics of Scale, Position, and Place in the Governance of Water Resources in the Mekong Region, *Ecology and Society* 10(2). 〈https://ecologyandsociety.org/vol10/iss2/〉

Marcus, George E. 1995. Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography. *Annual Review of Anthropology* 24: 95–117.

Tsing, Anna Lowenhaupt. 2011. *Friction: An Ethnography of Global Connection*. Princeton: Princeton University Press.

UNHCR (United Nations High Commissioner for Refugees). 2000. Flight from Indochina. In UNHCR ed., *The State of The World's Refugees 2000: Fifty Years of Humanitarian Action*. 〈https://www.unhcr.org/3ebf9bad0.html〉

小長谷英代．2017．『〈フォーク〉からの転回―文化批判と領域史』春風社．

横山　智編．『世界の発酵食をフィールドワークする』農山漁村文化協会，2022 年，235 p.

柳澤雅之 *

本書は，世界の発酵食に関するフィールドワークの成果を伝えつつ，その成果と実験室の分析を融合させた新たな研究領域「フィールド発酵食品学」の創設を提案する書である．

本書の目次は以下のようである．

序章 人類と発酵食

第 I 部 主食としての発酵食

1 章 酸っぱさに憑かれた人びと エチオピアのパン類をめぐって

2 章 酒を主食にするネパールとエチオピアの人びとの暮らし

コラム 1 酵母 人類のために進化し続けてきた微生物

第 II 部 副食としての発酵食

3 章 牧畜民の発酵乳加工とその利用

4 章 魚の発酵食をめぐる民族の接触と受容 カンボジア周縁地域を事例に

コラム 2 生業と「農村食」発展途上国

* 京都大学東南アジア地域研究研究所

における農村生活と食の変化
第Ⅲ部 調味料としての発酵食
5 章 近代化・グローバル化による味の変容 タイの調味料文化
6 章 ラオスの味，パデークの科学
7 章 納豆はおかずか，調味料か？ 日本と東南アジアの地域間比較
コラム 3 納豆菌 その細菌分類学上の位置づけ
第Ⅳ部 嗜好品としての発酵食
8 章 茶を漬けて食べる タイ北部の「噛み茶」文化とその変容
9 章 モンゴル国の馬乳酒「アイラグ」
10 章 東南アジアの餅麹になぜ新大陸起源の唐辛子が用いられるのか
コラム 4 乳酸菌 食を支える微生物
終章 フィールド発酵食品学の創出に向けて

目次を俯瞰すると，本書の全体構成がよくわかる．第 1 ～ 10 章では，アジアからアフリカにかけての各地の発酵食が取り上げられる．またコラムを通じて，おもに発酵の自然科学的な理解を深めるため，酵母，納豆菌，乳酸菌の基礎的な知識が提供される．第Ⅰ～Ⅳ部の構成からは，発酵食が主食，副食，調味料，嗜好品として，幅広く利用されていることがわかる．そして，序章と終章で，本書は，人類にとっての発酵食を振り返り，新しいフィールド発酵食品学の創出に向けた試みであることが述べられる．このように，全体の構成はサンドイッチ状になっていて，序章と終章がパン，フィールドワークの成果が具に相当する．

本書の具体的な内容は次のようである．

序章では，近年明らかになりつつある，発酵食の人類史的な意味が簡潔にまとめられている．発酵食は，一般の人がイメージしている以上に，私たちの生活に浸透している．人類は火を扱う以前から発酵を利用しており，発酵食は人類進化と密接に関係しているという．そして，私たちの祖先は有用な性質をもつ微生物を長い時間かけて作りだしてきた．すなわち，動植物だけでなく微生物についてもドメスティケーションが生じていたという．こうした視点は，地域ごとの多様な文化のひとつとして発酵食を取り上げる文化人類学的なアプローチだけでなく，人類史にとっての意義と関連させるという点で，従来にない新しいアプローチだといえよう．

序章ではさらに，本書の特徴としてフィールドワークをあげる．フィールドワークにより，発酵食が生産される現場で，生産者の「在来知」を理解し，また，その発酵食がどのように利用され，人びとの食生活を支えているのかが明らかになる．アジア・アフリカにおける具体的な発酵食のフィールドワークの成果が第 1 ～ 10 章に展開される．そして，コラムおよび終章で，近年，技術革新が進んだ，自然科学における微生物分析の手法が紹介され，自然環境と微生物の関係，ヒトと微生物の関係を融合させる環境，すなわち，フィールドワークと実験室の成果を融合させる新たな研究領域として「フィールド発酵食品学」の創設が提案される．

フィールド発酵食品学の研究視点は，次の

3 つに集約される．すなわち，1）自然環境に応じた生業より得られる産物を原料として，さまざまな発酵食品を作ってきた人びとの営みを環境との関係から解明すること，2）調味料，保存食品，嗜好品，そして儀礼・祭祀における供物など，幅広い利用と役割を担う発酵食品に関わる各アクター（生産者や消費者など）の伝統やアイデンティティといった文化とそれを成立させた技術に注目した「生活文化」を明らかにする視点，3）発酵食品の味や身体への効果を解明し，それらを生産・利用するために培われてきた「在来知」と，より有用な発酵微生物が選抜されてきた「ドメスティケーション」との関係性を明らかにする視点である．発酵食に関する多くの課題にチャレンジするために，研究者，実務家，消費者などのさまざまなアクターがフィールド発酵食品学に関わることができるようなプラットフォームを築く必要性を述べる．

サンドイッチの具に相当する第 1 ～ 10 章までの本書の大部分では，フィールドワークを基にした，世界各地の発酵食の生産と利用についての研究成果が紹介されている．

第 1 章では，発酵食大国であるエチオピアのパンが紹介される．主食として利用されるパン 3 種の材料や作り方，利用方法が詳しく述べられる．エチオピアではパン以外にも粥やアルコールなどの飲料類もよく発酵させて利用されており，まさにとりつかれているのではないかと思えるほどの発酵利用について説明される．

第 2 章は，酒を主食にした事例である．なじみのない人にはいささかショッキングかもしれないが，発酵食としての酒のもつ高い栄養価とそのおいしさを考えると納得できる．酒を食事として利用するネパールとエチオピアの人びとの酒と共にある暮らしが述べられる．

第 3 章は，発酵乳加工についてである．野生動物の家畜化からそれほど時間を経ずに搾乳も開始された．その最初期から，ヒトにとって有益な乳酸菌が選び取られ，生乳を発酵させた酸乳が利用されてきた．酸乳はバターオイル加工，チーズ加工することで，乳のより長期の保存が可能となった．乳加工と乳製品は，一万年の時をかけて多様に発達してきた．本章では，世界史的な変化と共に，地域社会での発酵乳加工品の利用について述べられる．

第 4 章は，メコン川下流域の魚の発酵食の事例である．カンボジアのプロホックやラオ人のパデークの詳しい作り方や利用方法が紹介される．地域独特の発酵食は，ついつい地域のアイデンティティと関連させがちだが，メコン川下流域における発酵食は，人びとの移動や民族間の交流により，その生産者や利用方法はどんどんと変化している．

第 5 章は，タイにおける発酵調味料を中心に，近代化，グローバル化における味と調味料文化の変容が紹介される．タイ料理の定番の調味料，ナンプラーの歴史は意外と新しく，20 世紀前半にタイ全土に広がった．また，「味の素」に代表されるうま味調味料の消費は 1960 年代以降，急拡大した．その中で，地域の在来の調味料の生産や利用に，ど

のような変化が起きているのかが本章の課題である．

第 6 章は，ラオスを代表する発酵食品，パデークを取り上げ，伝統的な製法や微生物と品質に関する暗黙知を科学的に分析した研究成果の一端が紹介される．分析結果は，パデークを生産・消費するラオスの村の人びととも共有され，パデークの品質安定・向上や利用促進に役立てられている．

第 7 章は，納豆である．アジアの納豆は，おかずにも調味料にも利用され，その形状や食べ方も多様である．そして，穀醤と魚醤が卓越する地域の境界にアジアの納豆地帯が形成されたとする．

第 8 章は，飲むためではなく，食べるお茶（ミアン）についてである．タイ北部の後発酵茶ミアンの生産と消費の現状，そしてそれらの変化について紹介される．1980 年代以降のタイの社会経済的な変化の中で，ミアンの生産と消費は大きく変わり，ミアンは「食べるための嗜好品」から「備えるためのモノ」に変わった．ただし，そもそもミアン生産者は，ミアンの茶園を覆う森林から多様な資源を利用して収入源としながら，茶生産を基盤とした生業を 100 年近くも安定的に維持してきたのであり，ミアン生産は今後も形を変えながら受け継がれていくと指摘する．

第 9 章では，モンゴルの馬乳酒アイラグの製法が紹介される．アイラグの歴史を考えると，人がアイラグを作り続けてきたのか，あるいは人が菌にアイラグを作らされ続けてきたのか，もはやどちらなのかがわからなくなるほど，両者の関係は密接である．

第 10 章では，東南アジアで製造される醸造酒や蒸留酒に必要な餅麹に，なぜ新大陸起源の唐辛子が用いられているのかという問いをカンボジアで探った研究成果の一端が紹介される．その結果，唐辛子が餅麹の材料に使われるという技術は東南アジアで多元的に発生したのではないかと指摘する．

本書は，「フィールド発酵食品学」の創設のためのキックオフの書である．多様なアクターが関わることのできるプラットフォーム作りが本書刊行のひとつの目的であり，それは十分に達成できていると考えられる．各章からもコラムからも，「発酵」好きの執筆者らが楽しんで研究している様子が十分にうかがえるからである．

しかし学際研究としてのフィールド発酵食品学の成果を出すにはまだこれからが正念場のようである．自然科学的な分析とフィールドワークの成果との融合は今後の課題である．ひとくちに「在来知」といっても，本章で述べられているように，「伝統的」な製法や利用は常に変化の中にある．変化に要する時間も，人類史的な時間から，農耕開始以来の 1 万年，近代化・グローバル化の数十年と，さまざまな時間軸が考えられる．微生物のドメスティケーションという視点は大変おもしろいが，歴史的な整合性もまた求められよう．微生物は，動植物に比べてなお一層，考古遺物として出土しにくいと思われるので，何らかのブレイクスルーが必要になるかもしれない．

本書はチャレンジングな試みについての書である．本書の構成は，すでに述べたように，

サンドイッチになっている．パンの部分も具の部分もそれぞれ刺激がありおいしく頂けるが，やはりサンドにして召し上がれ．おいしさのレベルがもう一段あがると思います．

生方史数編．『森のつくられかた―移りゆく人間と自然のハイブリッド』共立出版，2021 年，234 p.

竹田晋也 *

ユニークなタイトルの本書は，森を自然と人間がつくる「ハイブリッド（混成物）」としてとらえ，そのハイブリッドの生成，変容，崩壊のプロセス自体をみつめることによって，森の「レシピ」の再考を試みている．社会構成主義やアクターネットワーク論の延長線上で「森のつくられかた」を考えてみようという試みだ．

20 世紀に入ってからの「グレート・アクセラレーション」と呼ばれる自然と社会経済指標の急激な変化は，「プラネタリー・バウンダリー」という地球の限界を人類が超える局面にまで達しつつあり，人新世という地質年代区分が提唱されるほどに人類の影響は地球の隅々にまで及んでいる．本書では，編者ら執筆陣が研究対象としてきた森林を「人と自然がつくりだしたハイブリッド」としてとらえなおし，新しい観点から考察を試みようというのである．まずは構成に沿って各章を紹介したい．

第 1 章「森のつくられかた―ハイブリッドとしての森林」（生方）では，近代哲学における自然と人間の二元論をデカルトまでさかのぼり，そこから社会構成主義に至る履歴を辿って本書の理論的な前提を紹介したうえで，自然と人間のハイブリッドという森林のとらえかたと本書の構成を説明している．本シリーズの解説書的な性格上，「ある特定地域の森林を対象にして，歴史的にそのプロセスを明らかにするような綿密な事例研究としてのスタイル」（p. 5）はとらず，むしろ森林がつくられるプロセスを記した「レシピ本」のように記述していくとする．

第 2 章「森を認識する―森林とは何か？」（生方）では，個々人が抱くイメージとしての「森」と合理的な基準で定義された「森林」を対比させながら，森林がどのように認識され，社会集団によって共有されるのかを説明している．さらに住民・行政官・科学者の間での基準の「ゆらぎ」や認識の「ずれ」の具体例をあげて，認識の実態化と矛盾を考察している．

第 3 章「森の彼方を見る―近代化以前の山村を見るまなざし」（葉山）では，秋山郷や椎葉村の記録に触れながら，現代では忘れ去られたかにみえる山村をもう一度「認識の内」にすることを試みている．歴史を振り返ることで，豊かな山村像，山地理解を取り戻そうというのが 3 章の眼目で，平地の人々，すなわち都市住民が，森林と山村をどのように文化的に認識してきたのかを辿る．そして民俗学者の谷川健一の「自らの手で獲得した理由によってのみ，人はその土地と必然的なかかわりをもつことができる」（p. 64）とい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

う引用で締めくくっている．

コラム 1「森とつながる文化」（小林）は，カンボジアとミャンマーの例から自然とのつながりを紹介している．近代的で合理的な世界観のなかで生きるようになったカンボジアの人たちは，「自らを包む〈生命〉の環のなかでつながっているという意識」（p. 68）をもたなくなった．ミャンマー・カチンの森も〈生命〉の循環の出発点であり，終着点である．「カチンの人々と我々の違いは，その〈生命〉の連鎖と循環の意識が森にまで届いていないこと」（p. 70）でありこの「近代的な世界観と異なる視座があったことを思い起こす努力」（p. 71）が必要であるとする．

第 4 章「森を区切り，所有する―ラオスと日本における領域化」（百村）では，「森林関連法令によるラオス全国レベルでの森林区分の確定とその領域化」，「土地森林分配事業による村落レベルの土地森林区分の確定と領域化」，「REDD プラスによる森林の領域化」と順を追ってラオスにおける森林の領域化を途上国の例として紹介している．さらにそれと対比させた先進国の例として日本における所有者不明土地問題を不完全な領域化として取り上げる．旧来の所有・利用関係を現代的な関係に変えようとする過程では，小繋事件に代表されるように地元住民を困難な立場に追いやる「区切ることのデメリット」が顕在化する．参加型開発の分野で重要視される地元の声に耳を傾ける姿勢が大切であると指摘する．

第 5 章「森に科学を導入する―科学的林業・森林管理とその現地化」（生方）では，森林科学が東南アジアでどのように現地化されたのかを検討する．現地の自然・社会という基礎の上に，林野の所有制度がのり，その上に植物利用を調整する技術が存在するという三層構造のもとで現地化が進んでゆく．西欧の制度や技術の影響を受ける前に利用規制や民間の育成林業が自生的に発展していた日本に対して，東南アジアでは在来の木材市場や育成林業の技術体系は発達していなかった．そして国有林とコンセッションで森林を画一的に囲い込む林野制度は，在来社会と整合性のあるリンクを創出することができなかった．ここから得られる教訓は，「科学や技術を機能させるには，それらが現地の自然だけでなく，社会（や市場）とも整合的にリンクされていく必要がある」（p. 116）ことだとし，「自然や社会がどうあるべきかという規範的・倫理的な議論を避けることができない」（p. 117）と指摘する．

第 6 章「森を開発する―マレーシア・サバ州における森林開発とその後の森のゆくえ」（内藤・生方）では，サバ州の森林開発の歴史を概観したうえで，森林からアブラヤシ園への転用の担い手と制度，開発後のプランテーションと残された森の双方における状況を紹介している．木材ブームとアブラヤシへの大規模な転換を経験したサバ州の開発の歴史のなかで，変わりゆくものと変わらないものが考察される．まず開発の担い手が大企業や支配階層であることは変わらない．そして自然を切り売りするコンセッション・システムがレント（超過所得）を生み出し，森林を荒廃改変してきた．そのコストは，植民地

時代から先住民や地域住民に押し付けられてきた．また森林開発に関連する制度を操作してレントを支持層に配分しようとする政治も変わらない．このようなハイブリットの頑健性は今後も継続すると予想される．

第 7 章「森に環境価値を付与する―グローバルな環境主義が変える森林のあり方」（生方・内藤）では，日本の里山とインドネシアの泥炭湿地林を事例にして，森林から得られる便益の認知には，「資源から環境へ」「ローカルからグローバルへ」という 2 つの変化があると整理する．里山と泥炭湿地林へ向けられるまなざしの変化は，「資源から環境へ」と共通する．一方で異なっているのは，泥炭湿地林では国内外のエリートのグローバルなまなざしが支配的であるのに対して，里山では地域住民・市民・自治体・企業といったローカル寄りのアクターの影響が大きい．「グローバルな環境問題への対処という大義名分が，問題の責任を問えそうにない一般の人々の生活を抑圧する行為につながってしまう可能性」（p. 163）があることには留意が必要であり，「持続可能な社会の形成」への視点が重要であるとする．

第 8 章「森を『資本』にする―経済的アプローチと森林保全」（生方・百村）では，森林を便益が得られる自然資本とみなして，経済的なインセンティブによる保全を概観する．そのうえで，PFES（森林環境サービスへの支払い）と REDD プラスの例が考察される．ベトナムの PFES とカンボジアの REDD プラスに共通するのは，現場から遠いアクターの関与が強まっていることである．グローバル・アクターの関与や国家の監視が強まるなかで，現場の声が弱まってしまうことがとくにベトナムの例では危惧される．一方でカンボジアの例では，住民への利益配分やその使途への配慮がみられる．このように自然を資本や商品に転換するとき，現場の声を反映できる技術や制度デザインをどのように構築できるかが大切になってくる．

コラム 2「森と里山の価値が失われる―原発事故と森林」（満田）は，東京電力福島第一原発事故がもたらした多岐にわたる深刻な被害を地元の声も交えて伝える．福島県の総面積の 7 割は森林でクヌギやナラなどの広葉樹林の割合が高く，しいたけ原木，薪炭材，山菜やきのこといった山の幸を生み出す里山が地元の人々の暮らしと密接にかかわってきた．避難住民が「人間は，衣・食・住だけで生きているわけではない．人間が人間として生きているその土台がなくなってしまったのです」（p. 200）と語るほどに，事故の影響は計り知れない．そしてもとの森林と暮らしを取り戻す短期的な解決策はない．「復興と再生を急ぐのではなく，時間をかけて，地域の人たちが計画に参加する形での，森林･里山や暮らしの再生が望まれる」（p. 204）と結んでいる．

第 9 章「森のよりよい共創に向けて」（生方）では，「レシピ本」として書かれた本書の「食後の反省会」として，森がつくられるプロセスを「認識と社会化」･「制度化」･「働きかけと相互作用」の視点から再整理したうえで，そこから零れ落ちたものを確認して「改善」のために何が必要なのかを考察する．

零れ落ちたものは，1）自然の論理，2）場所性，3）参加と民主主義であるとする．そのうえでハイブリッドとしての森林のゆくえには，1）近代化で発展させてきた制度や理念をさらに徹底させる路線と，2）これまでとはことなる要素を入れ込む再構築路線の2つのやり方があるが，いずれにしても何のために「森のつくりなおし」をするのかという規範的な問いに答えるものである必要があると指摘する．最後に森の共創へ向けた再構築路線の指針が「零れ落ちた要素とそれらの導入指針案」という表にまとめられる．

以上のように本書は，ハイブリッドとしての森林という一貫した切り口で，さらに各章の議論がうまくつながっていくように構成されている．紙面の制約があり，詳しく振り返ることはできないが，各章は「ハイブリッド」としての森林を考えなおす糸口を提示し，それぞれに示唆的で今後の展開や着想を促す内容となっている．

最終章で，「本書は『森のつくられかた』の半分しか語っていない．残念ながら著者の能力的な問題で背景に追いやられてしまっているが，相互作用の相方である自然の『声』をきく必要があることは明らかであろう」（p. 227）と述べられている．たしかに「移り行く人間と自然のハイブリッド」を副題とする本書で，自然としての森の実態についてほとんど触れられていないのは残念である．しかし本書は全13巻構成の「森林科学シリーズ」の第2巻として刊行されたもので，ほとんどが自然として森林を扱っているシリーズ全体のなかでの役割は，ハイブリッドを人間の側から語ることであり，その意味で十分にその責務を果たしている．むしろ人間ばかりに焦点をあてる人文・社会科学分野の研究者に，捨象することのできないハイブリッドとしての自然の重要性を再認識させる解説書になっているとも思える．

水野［2020: 62–63］は，近代ヨーロッパ諸帝国と科学との関係に関する研究の動向を踏まえて「帝国林学ネットワークと在来知」を論じたなかで，「帝国林学とは，ヨーロッパ林学が派生したものというよりも，各地の実践に立脚したさまざまな林学モデルが森林管理官のネットワークのなかで交換され，相互に影響しながら構築されていく『ハイブリッド』なものとしてとらえることができよう」と述べている．ここで「各地の実践」はじかに自然と向き合うものであったため，否応なく自然の声が反映されている．人新世の森の共創においても，各地で進められている実践をつぶさにみつめ，そこに参加することで「自然のリズムや状況に合わせた工夫」が組み合わさっていくだろう．森林がつくられるプロセスを記した「レシピ本」である本書を出発点として，「ある特定地域の森林を対象にした綿密な事例研究としてのスタイル」での自然と人のハイブリッド研究がさらに進むことを期待したい．

最終章となる第9章の冒頭に「地球に降り立つ」［ラトゥール 2019］という言葉が掲げられている．では「地球に降り立つ」にはどうすればよいのであろうか．ラトゥールは，私たちが近代の終わりに行きつく場所として「テレストリアル」を想定し，生産シス

テム（system of production）に焦点をあてるこれまでの方法ではなく，発生システム（system of engendering）に焦点を移行させ，人間だけにエージェンシーを付与するのではなく，事象を引き起こす能力をもっているあらゆる地上的な存在と依存しあって一緒に暮らしてゆく道を模索することについて議論を進める．そして地球の表面の生物圏であるクリティカルゾーンの科学の重要性を説く．これはラトゥールのあくまでも哲学的な思索とそこからの提案である．しかしたとえば，いまも拡大する新型コロナウイルス感染症だけを考えても，あらゆる地上的な存在と依存しあって一緒に暮らしてゆく道しか選択肢がないことは容易に理解できる．

「再帰的なプロセスが森林や社会にどのような影響をあたえるのか」を検討するには，本書の枠組みのなかの想定されている「自然のプロセス」が重要となってくる．森の共創へ向けて「人新世の時代には，極端な設計主義は傲慢であり，極端な不介入は無責任」（p. 228）であり，「自然による創造や破壊に委ねる仕組み」として整形庭園（formal garden）ではなく風景式庭園（landscape garden），身近にあって自分の意のままにならない疑自然的な日本庭園の発想がヒントになるとする．最後に引用されている夏目漱石「夢十夜」にならえば，自然を彫り上げるのではなく，すこし力を抜いて自然の力を活かし委ねて掘り起こすことになるのだろうか．

原発事故で被曝した里山の復興と再生に辛抱強く時間をかけて向き合う態度は，人新世の森の共創にも求められる．外挿法で未来を予測して落胆し挫折するのではなく，現場主義で，あえて楽観的に，どこかに明るい出口を探してゆく．本書の「指針案」にもある「モノの会議」とは，知恵をもち寄るひらかれた寄合のようなものであってほしい．そうすれば意外な答えを，現場＝フィールドで掘り起こすことができるかもしれない．その可能性はこれからの地域研究にも共通する．

人新世の難題を抱える森林とは，さまざまなものが依存し合う関係性の総体だ．本書はそれをみるマクロスコープとして全体の見取り図をしめし，森林と人間のよりよい関係を再構築していこうとする関係者に新たな視点を吹き込んでいくだろう．本書の誕生を喜びたい．

引 用 文 献

ラトゥール，ブルーノ．2019.『地球に降り立つ―新気候体制を生き抜くための政治』川村久美子訳，新評論．

水野祥子．2020.『エコロジーの世紀と植民地科学者』名古屋大学出版会．